

大塚敬節
矢数道明
責任編集

近世漢方醫學書集成

17 中神琴溪

名著出版刊



南京中医药大学图书馆版权所有

近世漢方医学書集成 第I期・全30卷

ISBN4-626-00072-X C3347

近世漢方医学書集成 17 中神琴溪

第I期
全30卷

昭和五十四年十月二十五日 第一刷発行
昭和六十年十二月二十五日 第二刷発行

編者 大塚敬節

発行者 中村安孝

発行所 株式会社 名著出版

東京都文京区小石川三ノ十ノ五
電話東京(八二五)一二七〇番代
振替口座 東京七―〇五五九番

製版所 株式会社 日本写真製版所

印刷所 株式会社 伊藤印刷

製本所 株式会社 辻本製本



子約限定版

落丁本・乱丁本はお取替えします。

ISBN4-626-01210-8 C3347

責任編集

大塚 敬節

矢数 道明

編集委員

山田 光胤

寺師 睦宗

大塚 恭男

矢数 圭堂

松田 邦夫



中神琴溪肖像

凡 例

一、本書第十七卷「中神琴溪」には、『生生堂医譚』『生生堂雜記』『生生堂治驗』『生生堂養生論』『生
生堂中神家方書』『生
生堂方函』を収録した。

一、本書は全て影印版によって収録した。影印にあたっては次のようにした。

イ、新たに柱と頁数を付した。

ロ、底本を縮小し、一頁に半丁ずつ収めた。

ハ、裏表紙や記事のない白紙は省略した。

ニ、版本の場合、本文中の蔵書印及び所蔵者による書き込み等は省略した。但し、写本の場合
はその限りではない。

ホ、印刷不明な箇所は、他の版本等により補正したところもある。

一、底本は次の通りである。

生生堂医譚 版本（寛政七年版） 一冊（矢数道明所蔵）但し、表紙は寛政八年版を使用した。

生生堂雜記 版本（寛政十一年版） 二卷二冊（矢数道明所蔵）

生生堂治驗 版本（文化元年版） 二卷二冊（矢数道明所蔵）

生生堂養生論 版本（文化十四年版） 一冊（矢数道明所蔵）

生生堂中神家方書（生生堂方函） 大塚敬節所蔵写本 一冊

一、解説は山田光胤（日本東洋医学协会会长）が執筆した。

一、巻頭の中神琴溪肖像は、藤浪剛一著『医家先哲肖像集』（昭和十一年、刀江書院）によった。

中神琴溪・小伝並びに解題

山田光胤

略歴

中神琴溪の伝記は、『皇国名医伝』、『日本医学史』、石原保秀校訂復刻の『生生堂医譚』、龍野一雄氏の「名医月旦——中神琴溪」、『漢方と漢薬』第三卷第三号）等であり、著者は先きに、これらの資料にもとづいて「自由の医人中神琴溪」(『漢方の臨牀』第九卷第十一・十二合併号)を書いた。ところがその後、昭和三十八年に西岡一夫氏が、实地調査にもとづいた研究「独尊の人中神琴溪」(『漢方の臨牀』第十卷第二号)を発表し、琴溪の墓所についての著者の誤りを正し、且つ琴溪の晩年を髣髴たらしめた。

ところで、著者の琴溪評伝は、前記資料にもとづいて書いたのであるが、当時はこれ以外の資料はみあたらなかつた。昭和三十年四月、京都で日本医学会総会が開催されたとき、医史学会で著者が「中神琴溪の精神病治療」を発表した際、中神琴溪の子孫にあたる中神良太氏にお会いした。その折に確かめた範囲でも、当時は中神家にも、琴溪に関する資料は殆どないとのことであつた。

しかしその後、中神良太氏は、同家に伝来していた琴溪の稿本『生生堂論語説』を公表され、昭和五十一年にこの書を復刻された。その際、詳細な中神琴溪年譜を付けられたので、今、これらの資料を参考に、琴溪の略歴を記すことにした。

中神琴溪は、名を孚、通称右内、字を以隣よとといい、琴溪と号した。寛保四年（一七四四）、近江国栗太郡南山田村（現草津市南山田町）に生まれた。農家の出身で、大津の医家中神氏を継いだというのが通説である。一説には山田村の真宗、西念寺の住職、中神氏の次男として生まれたともいうとあるが、中神良太氏によれば、出生の姓は不明で、若い頃、京都の中神家へ養子に行つたと考えられている。

学問の初めは、二十七歳のとき、中根之紀に師事したが、医学の道に入ったのは中年で、三十余歳の折、たまたま六角重任の『古方便覧』をみて感激し、それより発奮して吉益東洞の著書を熟読し、東洞の思想に大いに共鳴したといわれている。しかし、良太氏年譜によれば、四十歳に

して医を学ぶとある。

琴溪は、はじめ大津に近い長等山の麓に住んでいた。この間に、大津の宿場女郎の梅毒治療に軽粉をしばしば用いて治験をあげ（『生生堂医譚』本文）、寛政三年（一七九一）、四十八歳のとき京都に移り、堺町四条に住んで医業を開き、大いに繁昌した。その後江戸に遊び、又諸国を遊歴したのち、近江の田上に隠棲し、また西山城、宇治附近の有王村に移って、桑や茶を植えて楽しんで来たということである。

この間、寛政十年（一七九八）には山脇東海（東洋の孫）の解屍に参加し、文化十二年（一八一五）七十二歳で長崎に遊学した。江戸遊学は、翌文化十三年であった。なお近年、矢数道明氏

が、吉益東洞門人録の中に、「江州、中神右内、号琴溪」という字を発見された。これによって、東洞の晩年に、僅かな期間ではあつたろうが、琴溪が門人として偶せられたことが判明した。

『日本医学史』によれば、琴溪は郷里山田村に帰って病没したとあるが、西岡氏は、琴溪が晩年を有王村で過ごし、この地で没



田村新田、宝蔵院に
眠る琴溪中神先生

したと考証している。この有王村（現井手町田村新田）に隠棲した理由は、今では明らかでないが、良太氏年譜によれば、いつの頃か光格天皇（一七七一—一八四〇）の天脈を拝診した功により、五十石を拝領したという伝承があり、田村新田が安永二年（一七七三）に六十四石の増収をえたということと符合するので、この辺りに謎解きの鍵がありそうである。

中神琴溪の墓は、京都府綴喜郡井手町田村新田、臨濟宗永源寺派、宝蔵院に在る。天保四年（一八三三）八月四日没、行年九十歳（『日本医学史』では九十一歳）。

なお、田村新田の墓は琴溪の弟子たちが建てたと考えられるが、このほか、京都市東山南禅寺北の坊町の光雲寺にも「元祖琴溪翁」と刻まれた墓がある。これは中神良太氏によれば、琴溪が妻の菊を葬った際、その戒名「自性本源大姉」と共に自らの名を刻んだものであろうという。

業 績

治 療 琴溪の業績は、その特異なる治術と治験こそ最も大きなものである。これについては、別項を設けて、詳細に記述したい。

江戸遊歴 琴溪が諸国を遊歴したことは、『日本医学史』に出ているが、くわしいことは書いてない。ただ江戸に下ったことがあるというのは著書『生生堂養生論』にもあるから確実だと思



中神琴溪の寿像(中神良太氏蔵)

う。それは次のようなことで知られる。当時の江戸は、ただ井戸を掘ると汚水が浸入して役に立たなかった(海が近いため埋め立てのためであろう)。それで掘り抜き井戸の掘り方が、彦太郎という人の発明で考案された。その始めの井戸は白木屋の井戸で、当時の金で四、五十両もかかったが、その後簡単な方法ができて、さかんに井戸が掘られるようになった。琴溪はその井戸掘りの仕方をみて感心し、くわしくその方法を述べているのである。

この琴溪の江戸遊歴の時期は、門人・喜多村良宅の著書『吐方論』に序文を書いた、文化十三年丙子(一八一六)秋九月であらう。

死体解剖 琴溪が人体解剖を行った根拠は、

『生食堂雑記』にある次のような記載である。

すなわち「およそ人身は熱の多きものにて、寒涼の薬を用ゆる方が多分にあるなり。何如となれば菜蘿蔔(大根)の如き柔かなるものにて、一日之を煮るといへども其形状は依然として変ぜざるに、此を喰うときは朝に食して暮にかわやに上るに何にても其形消化せざるはなし。又朝に食して直に刑せられし屍を、我自ら解体

して胃中を見るに、はや消化してありしなり。

是を以て之を觀れば、人身中の熱すること火よりも甚しと知るべし云々」とあるのがこれである。これは、医者が徒らに温補にかたよることをいませしめた文章の一節であるが、これによって、琴溪自から死体解剖を行ったことがわかる。

しかし、琴溪がこれをなした目的が、果して何処にあるかは不詳である。けれども、この記述から受ける印象では、厳密な形体的な検策を企図したというよりは、むしろ内臓の機能を目で見て確かめようとしたのではないかと考えられる。

ところでこの琴溪が人体解剖を行った時期は何時かということも一つの興味ある問題であるが、宝曆四年（一七五四）山脇東洋が初めて死体解剖を行って『蔵志』を著したことは全く無関係である。何となれば、当時琴溪は満十歳ぐらいの少年であったからである。そればかりでなく、東洋が没した宝曆十二年（一七六二）でも、琴溪は僅か十八歳ぐらいであつて、琴溪の解剖に関する事蹟は、山脇東洋の業績よりはるかに後年のことで東洋の孫、東海の解屍（寛政十年十二月十三日・良太氏考証）に立ち会つたのである。

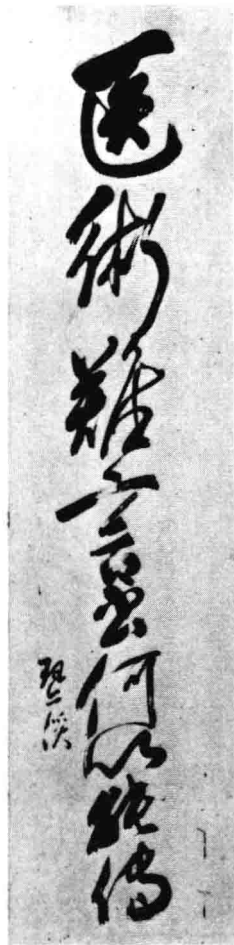
ところで、琴溪が解剖を行うようになった動機に、関連があると思われる記載をさがしてみよう。勿論これもまた、山脇東洋らの先輩の業績に影響された点もあるであろうし、実効を尚んだ琴溪としては、当然古方派の実証精神にも徹していたであろう。しかし、それよりも一層琴溪を

してこの事蹟にかり立てたものがあつたように思う。それは、琴溪が西洋の事情に相当通じていた形跡がうかがわれるからである。

『傷寒論約言』に次ぎのような記載がある。「大西に上古アスクレピヤテスあり、彼は實際の治療に徹してよく病を治した。その後ヒポクラテース（ヒポクラテス）などが出て、書を以て医を学ぶことをよしとするようになったため、有用の医術はいつしか衰退して今の医風となつたといふ云々」と、古代の西洋医学の歴史について、ると記しているのである。

中神琴溪は、頑固一徹な古方家のようにみえるが、実はこれで古今東西に視野を広めようとした努力がうかがえる。したがつてその死体解剖を企図した直接の動機こそ記載はないが、西洋の事情に通じた当然の帰結として、解剖を自ら行いたいと希望したことが想像されるのである。

著書 琴溪は、医術を修めるには師匠より直接の口伝を受けるべきで、書物でこれを学ぶことは不可であるとした。『傷寒論約言』にも「口授面命の事絶え、ただ書を以て医を学ぶ風となりしは仲景氏の罪なり……然れども今に至りては又傷寒論に非れば医を学ぶの道なし云々」と云つて、後世の医者が徒らに書を著すことをいましてゐる。したがつて、琴溪自身も自ら書物を著すことはなかつたが、門人が、師匠の講義を筆記したと思われる書物がいくつかある。これが、今日琴溪の著書とされているもので、それには、『生生堂医譚』（寛政七年）、『生生堂雜記』（寛政十一年）、『生生堂治驗』（『日本医学史』により文化元年）、『生生堂傷寒約言』（文政三年）、『生生堂



遺墨は半折一行大字
「医術難言 書何以能伝」
(石原明氏蔵)

養生論(文化十年)などがあり、そのほか数種の「方函」がある。ただし「方函」は、著書として人に示したのではなく、中神家或いはその門人が、自分で診療の際に用いたものであろう。

(以下引用文献として生生堂を省略し「医譚」、「雑記」などと記す)

琴溪の著書はみな仮名まじりの平易な文体である。これは、師匠の講義を筆記した証拠だと思ふ。これらの著書の内容は、それぞれの表題によって示されているが、「養生論」という書は、あとで述べる琴溪流の養生法ばかりでなく、医者的心掛けについても相当力を入れて説いている点まことに面白いものがある。

門流、門人 中神琴溪は、当時余ほど名が高かったとみえて、その門人も非常に多かつたようである。この間の事情を『日本医学史』は「従遊するもの頗ぶる多く、門下の籍に名を列するも

の一時三千余人の多きに及ぶ」と記している。

ところが、これほど多かつた門人の中から後世に名を残すような人はただ一人、喜多村良宅(後述)をのぞいて殆ど輩出しなかった。この点は吉益東洞の門人とは全く対蹠的である。したがって、門人にどのような人があつたかは、琴溪の著書の中にみられる人名以外には知ることができない。このようにして知り得た門人名には、次のような人々がある。

越前の伊藤王佐(述)(『医譚』編者)、近江の保木之光(和)(『雑記』編者)、江戸の喜多村良宅(鼎)(『養生論』序文)、阿波の安芸良平(均)(『養生論』跋文、『傷寒論約言』編者)、加賀の梁田厚徳(『傷寒約言』の序文)、北総の大塚碩庵(健)(『傷寒論約言』編者)。

また『雑記』の中に出てくる質問には、琴溪がいちいちこれに丁寧な回答をして自分の医説を述べていることから、これらの質問者は多分門人であろう。それらの人名には、丹波佐治の稲次圭二、越前敦賀の五十嵐仙蔵、日向飢肥の矢野道与、保木大巖(之光と同一人か)、薩摩の大迫道節、讃岐高松の齋藤以方、越前府中の伊藤数馬、丹後田辺の吉田舜郷、奥羽秋田の佐藤玄範、越前福井の侍医細井祐菴(この人は『医譚』に自ら灌水を実験した話がある)などがある。これらの人々は、琴溪の著書にのるほどの質問をしていることから、門下の中では囑目されていたものではないかと考えられる。

喜多村良宅について 琴溪の門流を述べるに当たっては、ぜひともふれておかねばならない人

がある。それは、数多い中神門下で、後世に名を成した唯一人の喜多村良宅である。

良宅がその名を残したのは、著書『吐方論』によるのであるが、正伝は残念ながら不明である。ただ、『吐方論』によって、名は鼎、号を良宅といい、江戸にいて薩摩藩の侍医をしていたことだけはわかっている。

『吐方論』は土田翼卿の『癲癩狂經驗篇』（文政二年刊行）と共に、江戸時代に著された精神病に関する専門書の一つで、極めて貴重な文献である。筆者はこの書物について、すでに「江戸時代精神病の治療に用いられた吐方」として報告した（『日本医史学雑誌』第九卷第二号）。

しかし、喜多村良宅を語るについては、この書を紹介しなければ述べることができないので、その概略を再録することにした。『吐方論』の前半は吐方に関する概説で、後半で狂癩（精神病）のことが記載されている。

精神病を狂または狂癩（内因性精神病）と癩（神経症）に分類している。

精神病の原因は、「父子血統相伝」（遺伝的素因）と「幼時大いに驚き物胸中に凝り」（幼時体験）また「成人後、心身を過度に勞し、また驚愕心配事のため抑うつ憂愁して成る」と述べ、現在の学説に近い卓見を示している。

吐方の適応症と禁忌 狂癩の症状についてくわしい観察を記している。

治験例は、精神分裂病や反応性精神病、神経症などいろいろな病名が推定される患者について